International IC Association of Japan

IIAJ

NEWS NO.105

（社）国際IC日本協会機関誌
発行年月日 2004年9月25日
発行所 （社）国際IC日本協会
150-0031 東京都渋谷区桜丘町 13-9
クリエート桜丘センチュリー 21 506号
TEL:03-5459-5703 FAX:03-5459-5706
E-mail: LEB03055@nifty.ne.jp
発行人 橋本 徹
編集人 長野 清志
頒 価 1部200円

第27回IC小田原国際会議レポート

『新しい家庭、新しい社会、新しい国、新しい世界
―社会の核としての家庭の在り方を考える―』

去る6月11日（金）から13日（日）まで第27回IC小田原国際会議が、『新しい家庭、新しい社会、新しい国、新しい世界 ―社会の核としての家庭の在り方を考える―』のテーマの下、アジアセンターODAWARAにて開催されました。この会議のために、ニュージーランド、台湾、イギリス、オーストラリア、インド、韓国からの9名からなる第2回アクション・フォー・ライフ（P.13註1参照）のグループを初め、アメリカ、韓国からの海外代表に加え、北京からの中国国際交流協会の代表2名も来日しました。更に日本で学ぶセネガルや中国からの留学生や日本在住の、イギリス、スリランカ、バングラデシュ、韓国の方々も参加されました。国内からも福岡や愛媛や大阪等遠隔地からの参加者もあり、計11ヶ国・地域から約90名が参加しました。本年の会議も、アクション・フォー・ライフのグループの各国の青年たちに加え、日本の大学生や留学生の方たちの参加もあり、大変活気に溢れたものとなりました。

開会式

開会式では、橋本徹国際IC日本協会会長の歓迎挨拶に続き、ニュージーランドのピーター＆グレニス夫妻から次のような話がありました。

先ずグレニスさんは、次のように語りました。

「新聞では、連日のように家族の不和や離婚、子どもへの虐待、種々の依存症の増加等の記事を目にします。家族の崩壊とは、社会の崩壊に他ならないのです。無力感にとらわれますし、どうしたらこの流れを変えられるのかと思案にくれます。物の豊かさが人生の意味や目的を深めてはくれなかったのです。

健全な社会の基礎となる幸福で健全な家庭はどのように作れるでしょうか？ 社会における諸問題は、家庭にその答えを求めることができると、私は信じています。特に幼児期における愛情や理解の不足によって生じた心の傷を癒すためには時間と勇気が必要とされます。

妹から学んだこと

私は、思いやりと規律のある家庭で5人兄弟の一人として育ちました。十分な教育も受け、仕事も順調でした。しかし、外目には一見成功したように見えても、私たちの家族の生活は実は安定したものではありませんでした。看護婦をしていた末の妹は、お酒を飲み始めました。それは病院での救急患者の対応という仕事へのストレスを紛らわすた

■主な内容■

◆第27回IC国際会議レポート 1-9
◆IC国際会議に参加して 9-10
◆アクション・フォー・ライフ・レポート 11-13
◆「心を育む」 14-17
◆「ICと私」 17-18
◆ICニュース 18-20

めなのだと、妹は、私達家族と彼女の夫に、断言していました。妹はやがてアルコール中毒になり、結婚生活も破綻しました。いろいろなカウンセリングも受けましたが、治すことはできませんでした。絶望の余り、9年前に妹は自ら命を絶ってしまいました。私達家族は、呆然とし嘆き悲しみました。しかし、ついこの3年前に初めて、私の裁くような態度や無条件の愛の欠如が彼女の絶望感を生むことに加担していたという、その責任を直視するようになったのです。

インドで依存症センターのコーディネーターと会った時、依存症というのは、「個人の問題ではなく、家族の問題なのです」と言われました。飲酒を単に彼女の問題とみなし、妹が心の内で恥じている気持ちを私達の家族間の関係が更に増幅させていたということに気付かなかったのです。この失敗の重荷から自由になるため、先ず私も内なる癒しを見い出さなければなりませんでした。カウンセラーでもありテレビの司会者でもあるジョン・ブラッドショーのファミリー・システムに関する2冊の本を読んで、自分の家族を理解し始め、その核となる部分が機能していなかったと認識しました。

あるがままを受け入れる

このようにして、私の癒しは始まりました。真の自分を見い出すのを邪魔している殻が何であるのか見い出す必要がありました。

最初に見つめなければいけなかった殻というのは、他人の期待に応えようとする性癖でした。両親から始まり、先生や友人、そして夫にさえも。いつも期待に応えようとしていたのです。

二つ目は、他人が自分を傷つけた時、防衛的、批判的になり、又、相手を裁くようになり、そして、最悪なことには、怒りを覚えるようになることです。

三つ目は、自分の家族、そして、働いてきた組織の忠実なサポーターとして、他の人々に認められることに自分の価値を見い出していたことです。

四つ目は、朝起きてから夜まで、自分を裁いていたことです。自分はダメだという声がいつも聞こえていたのです。常に他人と自分を比べていました。

これらの殻を脱ぎ捨てたため、自由を見い出し始めたのです。あるがままの自分を受け入れられるようになりました。一人のユニークな人間として自分を愛することを学びました。『妻が生まれ変わった』と夫は言いました。

先ず家族の中から

この5週間、夫のピーターと私は、この『アクション・フォー・ライフ』のチームの一員であった娘と共に台湾に滞在しました。娘が私達家族の力学というものをよりよく理解するのを助けてくれました。娘は既に25歳になるものの、私が彼女に抱いていた夢や願いをまだ満たしてくれるような気がしていました。何度もの話し合いと幾許かの涙の後、娘がずっと感じ続けてきた私の感情的な支配から娘を解き放つ必要があると気付きました。自分の子供達を愛し思い遣ることはできますが、自分自身が自尊心を見い出すことなくして、娘達の自尊心を築くことなどできはしないと分かったのです。

今日、的確な解答を見い出し、互いを思い遣ることのできる本当の世界家族となるためには、私達一人ひとりが必要とされるのです。先ず私達一人ひとりが家族の中から始めることができるのです」。

続いてご主人のピーターさんは、次のように語りました。

「40年前の私のIC/MRAとの出会いは、長く続いていた父との難しい関係を無視することの愚かさを、私に示してくれました。10代の終わり頃、父と私は、多くのことで対立しました。状況が悪化したので、私は家を離れ都会に住むようになりました。初めは、都会に一人で住むというその挑戦を楽しみました。しかし、2年が過ぎると、『お金を稼げば稼ぐほど遣ってしまうような生き方、古い車を最新のスポーツカーに変えるのは、ガールフレンドを変えるようなもので暫くの間は楽しくても、真の満足は与えてくれない、そのような生き方から自分の人生を捧げるに足る真の満足は得られないのだ』と気付いたのです。

私は、政治家やビジネスマンや労働組合の不正直さや自己中心的なやり方をいつも非難していました。しかし、それは、自分の生き方とまさに同じだと気付きました。正直に自分の生活や隠された部分にじっくりと向き合ってみると、所得税を過少申告したり、免許料を滞納していたりと、国の悩みの種だと非難していた、まさに同じことを自分がしていたのでした。私もやはり不正直でとても自己中心的だったのです。私は、自分自身がニュージーランドにとっての問題の一部である代わりに、国の必要を満たすために働きたいと決心しました。そして、どのくらい税金を滞納していたかを調べ、政府に納めました。

又、雇い主に対しても、ごまかしていたと思われる金額を返しました。

●体験を語るピーター・ウッド氏

父との和解

次に、家族のことを考えました。絆で結ばれた家族は国の力になります。しかし、離婚や子供が疎外されることが増えるなど、今や家庭の問題は国にとっても重大な問題になっています。私は、怒りや憎しみに打ち勝ち、父親との不和を解決するために行動を起こさなくてはなりませんでした。これは、私にとって、最大の挑戦となりました。なぜなら、自分の方が悪いと認めて、謙虚になって謝ることを自分自身に納得させなければならなかったからです。私は、父が先に謝らなくては嫌だと思っていました。暫くたって、人を謝らせることはできない、それは、彼等自身が決める問題だからと気付きました。私ができること、そして、すべきことは、自分の間違っていたところを謝ることです。初めは内なる声を信じることができず、自分の中でああでもない、こうでもないと言い争っていたのです。しかし、方向を求めるために静かに耳を傾ける中に『力の源泉』を見い出したのです。すべてうまく行くと確信しました。後は行動あるのみです。大変長い時間がかかりましたし、少なくとも一度は失敗しました。しかし、遂に勇気を得て、自分のこれまでの生き方について話し、父への振る舞いについて謝りました。それが新しい出発となりました。その時から全てお互いに同意したという訳ではありません。又、急に完璧な人間になれたわけでもありません。けれども、新しいレベルの友情と尊敬の念が生まれ、続いたのです。これは本当に心に自由を得る体験でした。内なる声に導かれ、それまでの仕事を辞し、無給でMRAの仕事を始めました。家族一人ひとりとの関わりから始めるというその仕事は、まさに人間性の根幹に関わるもので、新しい社会を作るための最も賢明な行動だと思えました。これは、私の若い頃の体験です。

家庭の持つ大きな役割

後に、妻と私は、軍隊によるクーデターによりフィージー人とインド系フィージー人に引き裂かれていたフィージーに招かれました。二つの民族が一つになれるよう助けるための会議をサポートするためでした。首相を退任させられたティモシー・バヴァドラ氏とは個人的な友人となりました。彼はガンの手術の後、ニュージーランドで私達の家にも泊まりました。彼は人々や国々の和解ということに大変興味をもち、その結果、奥さんに正直になりました。そして、自分を首相府から追い出すためのクーデターに関わったのではないかと疑っていたフィージー人の古参政治家に謝ろうと決心しました。奥さんに励まされて、その謝罪を実行したのです。そして、数日後、その人から『病気の回復を祈ります』というお見舞いの言葉を添えた大きな花籠が届きました。感激的な出来事でした。

もう一人の別のフィージー人の話です。フィージーの大酋長である彼は、このクーデターを扇動したのです。しかし、彼は新しい精神を見い出し、奥さんと子供たちに自分の横暴だった振る舞いについて謝りました。そして又、先程述べたバヴァドラ氏を脅迫するキャンペーンを扇動したことを彼に謝りました。それ以来、彼はフィージーが分別と良識を保って行くための大きな力となったのです。

このような例は限りありません。家庭で起きることが、社会や国に非常に大きな影響を与えるということです。家庭の中の精神を新しくすることは、社会を、社会の精神を新しくし、国の精神を新しくし、そして世界をも新しくするのです。これ以上大きな役割が存在するでしょうか？」。

『静かな時間』の意義

翌12日は、早朝7時から、オーストラリアのナイジェル・ウッド氏による『静かな時間』の紹介から始まりました。

「『静かな時間』とはその言葉通り、時間を充分にとって静けさの中で、心の中の想いに耳を傾けることです。私は、『静かな時間』とは人生でもっとも従うのが難しい規律だと思いました。私は根っからの怠け者です。私は高校生活の最初の2年間歯磨きをしなかったことをよく覚えています。歯磨きを習慣として好んでするようになるまでには長い時間がかかりました。ただ面倒くさかったのです。しかし、今、私は27才です。歯も私にとって大切なものなので大事にしようと思えるようになりました。『静かな時間』も自分の歯を磨くことと同じです。毎朝『静かな時間』を持つことは、自分が平静で、平和な気持ちを保つために必要です。以前はそんな事は重要だとも思いませんでした。しかし、『静かな時間』を持てば持つほど、それが自分自身を大切にするために重要なのだと分かるようになりました。

まだ、毎日必ずとはいきませんが、過去3年間、多くの時間を使ってこの『静かな時間』を試してきました。

そして、どうすればこの『静かな時間』が役立つかということが分かり始めました。

●一番右端がナイジェル・ウッド氏

1、あなた自身から始めよう

『静かな時間』は私の全ての問題を解決してくれる訳ではありません。しかし、自分のどこを変える必要があるか、どこが問題なのかを教えてくれます。

2、疑問を持つこと

自分自身や自分の生活について疑問を見つけたらそれを紙に書き出してみる。そして、どこを変えていったらいいのかと問い続ける。すると答えが見えて来ます。

3、耳を傾けることを学ぶこと

何に耳を傾けるのか、私にとっては神の声に耳を傾けることです。人によっては良心の声、内なる声、内なる叡智に耳を傾けることです。私は、創造者がいて私をある目的のもとに生み出したと信じています。『静かな時間』の中でその目的が何なのかを知ろうと努めます。つまり、いろいろな問題についての答えが欲しいのではなく、生きる意味そのものを見つけたいのです。

つまり、3つの事柄とはあなた自身から始めること、問いかけをすること、そして、内なる声を聴くことです。

私はしばしば嫉妬深くなることがあります。アクション・フォー・ライフのメンバーと旅をしていたとき、メンバーの一人に嫉妬心を覚えましたが、それは、だんだん私の人間関係の全てに影響していきました。昨日その友達と話をすることができました。そして、お互いに避けていたことを認め合いました。友人はなぜお互いに避けていたのかとたずねました。嫉妬心から避けていたこと、そして自分が上等な人間ではないと認めることの痛みに面と向かいたくなかったことに、私は気付きました。皆が自分を受け入れなくなることをとても恐れていました。そのため、しだいに彼らのしていることが間違っていると決めつけ、信用しなくなり、不満を覚え、孤立していきました。ついに私は彼らのところへ行き、自分の嫉妬心を認め、彼らへの判断が間違っていたことを告白したのです。私たちはお互いに深い話し合いをし、私は自分の弱さを知り、謙虚になることができたと感じました。

昨晩、多くの人達のお話しを聞きましたが、それらの話の中心には人間関係という一つの共通のテーマがありました。家庭における、又、職場での上司や部下との間等、常に人間関係というものが存在します。

皆さん、ご主人や奥様との関係はどうですか？

友人に嫉妬していませんか？

人を裁くということを考えた時、あなたの心の中にすっと浮かんでくる顔はありませんか？

誰かのことを怒っていませんか？

信用出来ない人がいませんか？

ずっと以前に付き合うことをあきらめてしまったような人はありませんか？

それは、どうしてでしょうか？

一番最近、あなたが誰かに愛を表現したのは何時でしょうか？

一番最近、ほんとうに愛されていると感じたのは何時ですか？

寂しくないですか？

誰か、回りに寂しそうな人はいませんか？

自分の目的のために利用してしまった友人はいませんか？

それぞれ自分の人間関係を考えてみましょう。

そして、自分の人間関係を改善するために、自分のどこを変えるべきかを、問い直して見ましょう！」。

このような『静かな時間』の意義の説明と自らの体験を話してもらった後、参加者は共に、それぞれの心の声に耳を傾ける時間を持ちました。

家庭の在り方

二日目の全体会議のテーマは、『社会の核としての家庭の在り方を考える・家庭の在り方と自分の在り方、仕事・学校と家庭のバランス』のテーマで開催されました。先ず、台湾のグレース・リュウ夫人は次のように話しました。

「私には息子が1人、娘が1人います。今、娘は、21才でアクション・フオー・ライフ（AfL）のプログラムに参加し、1年間大学を休んでおります。息子は19才で大学の1年生です。母親として、子供たちが自由に話せる場を作るためにはどうしたらいいかということを学習している段階です。

以前、子供たちがかんしゃくを起こし、どなりまくったことがあります。その時、私は子供たちに『何でそんなにどなるの！』とどなり返したことがありました。今、私は母親たちのための講座を行っていますが、子供がそのように叫んだ時には、『どうしてなの？叫びたいような怒りが心の中

●リュウ・レンジョウ夫妻

にあるの？』と聞くように言っています。又、今では、子供たちが、何かいろいろ愚痴をこぼしたいような時には、自由に話ができるようなチャンスを与えております。彼らがそのフィーリングについてきちんと話しをすることができると、お互いにコミュニケーションがよくとれるようになります。そして、お互いの関係が今までより良くなってきます。

そのフィーリング（感情）とビヘイヴィア（行動）ということですが、親は、通常子供たちの行動を見て何らかの対応をします。つまり、子供たちの感情というものについては、あまり考えないのです。今では、もっと重要な要素である、まず子供たちがどういった気持ち、どういった感情を表わすのかということを把握し、理解するようにしています。そのあとに、行動ということを見るようにしています。台湾のICが行っている、どうしたらよい両親になれるかということを学ぶためのワークショップで、ある一人の母親が、『今、息子のことで困っています。息子は時々かんしゃくを起こして泣き出し、30分は絶対に泣き止まないんです。どうしたらいいでしょう？』という質問をしました。『じゃ、その時、あなたはどうしますか？』と聞くと、『男の子なんでしょ。めそめそ泣くんじゃありませんと言っています』と答えました。次に息子さんが泣かれた時には、『泣き止みなさい！』と言うのではなくて、『きっと大変なことがあったのね。だから泣いているのね。とにかくその気持ちが晴れるまで泣きなさい』と言うようにと提案しました。2週間ほど経ち、そのお母さんは、『一体うちの息子はどうしたんだろう、また泣き出したけど、10分で泣き止んでしまったと夫が不思議がったんです』と言ったのです。家族の中で一番重要なのは、それぞれの家族が、自分の本当の気持ちをきちんと表現できるということだと思います。子供の将来のことを考えて、いろいろなルールとか、しつけがそれぞれの家庭にあると思います。しかし、今、私が非常に重要と思うのは、それぞれのフィーリング、感情をどうやって表現するか、どうやって発散するかということです。つまり、そういったフィーリング、感情をきちんと受け止めて理解をするということです。それを学びとることにより、新らしいファミリーになることができると思います」。

次は、ご主人のリュウ・レンジョウ氏の話です。

「台湾においては、家族のための15の講座を毎週、開いています。いろいろな人たちが、様々な問題を抱えて来るので、そうした人たちの200人分、200種類の愚痴を聞いてあげる訳です。現在、家庭というのは大変重要なポイントだと思われています。いろいろな社会問題がありますが、究極的にはそれらの問題は家庭・家族に由来しているのだと思います。

第一の問題は、「学習する」そして、自分を「成長させる」ということです。人生とはそういった勉強、自ら学ぶ、そして成長していく課程だと思っています。学習することをストップするならば、そこで家庭というものも破綻していくということです。『私は今、成長しているか、自らを成長させているか』ということを、常に自問自答しなければなりません。

次の4つのポイントについて学習し、成長していく必要があると思います。

先ず第一に、真の人生の意味とは何かと自らに問うことです。

それぞれの人生は自らの手で作っていくものであり、貴重なものです。一体どれだけの人が自らの人生が、ユニークで、貴重なものだということを認識しているでしょうか？

しかし、そうした貴重であるということを、それぞれがユニークだということを認識できなければ、その人の成長は止まるということです。自分の人生を自らが尊重し、ユニークなものとして理解し得なければ、どのようにして他の人々の人生の独自性、ユニークさを尊重し、理解できるでしょうか？ファミリーワークショップでは、毎朝起きたら鏡の前に立って、自分は貴重な存在だろうか、ユニークだろうかと問いかけてみるよう提案しています。

第二には、真の意味での結婚を認識するということです。

例えば家族が社会の核とするならば結婚が家族の核だと思います。結婚するということは元の家族を離れ、新らしい生活、新らしい家族を作るということです。女性だけでなく、男性も新らしい生活・家族を作るのですから元の育った家族から離れるわけです。新らしい家族ができるということは、それまで育った家族の価値観とは全く違うもの、今まで培った価値観が新らしい家族ではまた違った新らしい価値観を生むということです。ですから自分にとって慣れていないことを、これはダメだ、嫌いだというのは間違いです。例えばご主人は、小さい時からテレビを見ていた。彼の昔の家族においては、テレビを見ていて良かったわけです。一方、奥さんの家庭ではお母さんがテレビを見てはダメだよと言っていたとします。それら違った価値観の下で育った男女が結婚をし、子供が生まれます。そこで問題はそれぞれ違った価値観をもつ家族から来た2人が、テレビについてどういう家庭の規則を作るかということです。奥さんがご主人に『テレビの見過ぎだ』と言います。ご主人が見るのはまだ仕方がないけれど、それを息子にまで続けて欲しくないと言うわけです。例えば、そういった同じ問題で夫婦が　10年、20年と仲たがいをするわけです。テレビはあくまで一つの例で、それ以外にも沢山のことがある訳です。それらの原因で、新らしい家族を作った夫婦が10年、20年、30年と仲たがいするということは、要するに、お互いに

相手が間違っている、自分の方が正しいと思うからです。正しいとか間違いとかいうことではなく、全く価値観が違うということです。それぞれ違った価値観を有する家族から来て結婚するのだからお互いに違ったところがあって当然と、お互いの違いを認めることが必要です。問題の原因は私とかあなたとかにあるのではなく、価値観の違いから問題が起きるのです。そのような違いがあるという認識のもとに、お互いに歩み寄って話し合えば、それほど大きな問題とはなりません。

第三は、学習して成長するということで、親に対しての尊敬の念を持つということです。

もちろん、単に親であるからというのではなく、社会の一人の人間として認識する必要があります。みな完璧な人間ではありません。両親というのは、いろいろな問題を抱えながら、それらに対処してきたわけです。ですから、彼らが子供から成長してきたその課程を経て今の彼らの価値観がある訳です。我々も同様の課程を経て成長してきた訳です。私たちがいろいろな苦しい経験を重ねてきて今の両親の考え方を認識する、親に対して、そうした認識をもつ必要があります。結婚後の多くの問題が、親との関係が難しい状況にあったということに起因しています。やはり子供時代の苦痛とか、そこから来たストレスがあった場合には良い親になるのがとても難しいのです。ですから、親がそれまでに経験したことについての問題を解決する必要があります。

第四は、自分を理解し、それによって学習し成長するということです。

カウンセリングする時に、あなたの過去について話して欲しいと言うと、『いや、過去は過去であって、現在の私とは関係ない』と言う人がいます。今の人生の状態を認識する上では、やはり過去にどういったことがあったのかを理解する必要があります。過去のいろいろなことと折り合いをつけることによって、現在の状況を克服することができます。人間というのは、普通、頭で考えているのですが、もうひとつ、心、頭と心、この2つをもって考える必要があります。お互い、頭と心で話し合うことです。一つの能力といいましょうか、心と頭とをいっしょに調和して考えることです。心と頭の両方を使って行動を起こすということです。何処に居ようとも、私たちは自らを成長させるため学び続けていく必要があります」。

アクション・フォー・ライフに参加しているイギリスの青年、キース・ラスト氏も自身の体験を次のように大変率直に語ってくれました。

「一つお話しをします。イギリスの若い青年の話です。彼は、憎しみ、非難、怒り、飲酒、そして、女の子を追いかけ回すというサイクルの中に生きていました。自分自身と世間を憎み、誰をも信じるな、を信条にしていました。彼の両親は彼が6才の時に離婚しました。しかし、その時はまだ両親共に彼を愛していたので、それは余り問題にはなりませんでした。彼が11歳の時、父が再婚し、問題は始まりました。この新たな結婚で生じた問題が、全て彼と彼の兄のせいにされました。彼らは、父親から『お前達は自分の人生において、もうたいした意味をもたなくなった』と告げられたのです。

実は、この若い青年とは私のことです。

自分が一番近しく思っていた人から捨てられたのですから、自分は全く価値のない人間だと感じました。父は2年後に2度目の奥さんとも別れ、私は、再び父と会い始めました。しかし、その関係は他の家族との関係同様あまり良好なものではありませんでした。私は、全ての人に、とりわけ、自分自身に怒りを覚え、自分に近づこうとする誰をも信用しようとしませんでした。それは、再び傷付くのが怖かったからです。

15才の時、気晴らしになるかと思い、お酒を飲み、女の子を追いかけ回し始めました。しかし、気晴らしどころか、かえってみじめになるだけでした。

2000年にICの若い人たちが主宰する「導きを学ぶ(Learn to Lead)」というリーダーシップの技術を若い人たちに教える組織に出会いました。

もし、母が自分を理解し、兄との喧嘩がおさまり、父が謝ってくれるようになるためには、自分の態度と行動を変える必要があるとそこで気付きました。自分がどう感じていたのかを母に話し始めると、母は私を理解してくれ始めました。私は兄に怒りの気持ちをもって対応するのを止め、父に過去のことを話したのです。これによって、家族との関係が向上しましたが、この過程は、現在も進行中です。

『アクション・フォー・ライフ』のプログラムの間に、特に家族及び自分を愛するというワークショップを通して自分

●熱心に聞き入る会議の参加者

自身を発見しています。これらの体験を通し、家族に、自分の行動が苦しみを与えたことに対する謝罪、又、過去にして来たことを正直に伝える手紙を書くことができました。又、『内なる子供』という概念も理解し、傷付いた自分自身の『内なる子供』の親の立場に自分自身を置くことができました。これは、私の過去の苦しみを克服するのに、そして、全的な個人としての成長と自分を愛し始めるのに役立ちました。そうすることにより、自分が幸せを感じるために、もう他人に依存する必要がなくなりました」。

続いて小田原在住の加藤憲一氏は、次のような話をしてくれました。

「先程、リュウさんが、家庭の核は夫婦と言われましたが、私の場合は子供のことでその核を作り直すことができました。大学を出た後、マネージメント・コンサルタントを4年間やったり、子供達の暮らし方や教育に関わる市民団体の仕事をやったりして、充分に色々なことを知り、人間的に成長したように錯覚していたような中で、娘が白血病になりました。最初は通常の抗癌剤を使いました。当時2歳だった彼女を半年間東京の病院に預けた結果、その時は何とか直りました。自分は病気と言うのは何か理由があって与えられるものと思っています。きっと何か自分達の暮らしや価値観に問題があって、それを気付かせるための娘の病気だったと思います。しかし、最初の時は自分達に充分な問いかけが出来ないまま娘の病気は直ってしまいました。その後は何ごとも無く、小田原の市民グループや農業者の方達等との交流を深めていましたが、5年後に娘の病気が再発しました。医者は抗癌剤の治療もするが、どうなるか分らないと言いました。その時は、娘の命を差し出されて、『一体どうするのか』と天から突き付けられた思いがしました。それで自分達の暮らし方における色々な事を見直していきました。娘の命を救うため、知識を総動員して、民間の自然療法も随分探したりしましたが、結局は私と妻との関係をしっかり固めろということだったのです。そこまで10年程、きちんとした夫婦としてやってきたつもりではあったのですが、やはり、根っこのところ、人間にとって一番大事なものは何なのか、どうして生きることが人間にとって幸せなのか、そのために自分達の暮らし方をどうしていくのか、そうしたことに対する了解をきちんと取れていなかったのです。娘の病気ではっきり分かったのです。これは、一方的に妻の問題というのではなく、私自身も分かったつもりで活動して来たものの、本当の意味では分かっていなかったのです。それを妻のせいにしてきた部分が随分あったと思います。心の中でか家内に謝ると共に、彼女を責めるのでなく、先ず自分でできることから始めようと思いました。娘の命を養うために農薬も化学肥料も使わない安全な食べ物を薬として食べてもらうために、より一層農業に打ち込むと共に、私も家庭に戻って、色々な手当てを彼女と一緒にして行きました。様々な方々に支えられ、何がどう効を奏したかは検証出来ませんが、病院に見放されたにも拘わらず、娘は回復して、元気に中学校に通っています。今は抗癌剤を止めて、家庭で療養している訳ですが、一切病気の再発はありません。娘の病気によって私達夫婦の絆が作り直されたことは、私の人生の中で大きなことだと思います。その時に、人にとって本当に大切なものは何かということを突き付けられました。小田原の大地が、小田原でできたお米や野菜が、そして小田原の人々が皆で娘の命を支えてくれたと、私達夫婦も実感を持って受け止める事が出来ました」と話された後、その小田原をより素晴らしい街にするために、現在『小田原を拓く力』という市民運動を展開されている様子を報告してくれました。

全体会議に続いて、同じテーマでの分科会が開かれましたが、それぞれの家庭での問題やそれに対する意見やアドバイス等、真摯で活発な話し合いが行われました。ティーブレイクの時間には、ICよつ葉会（女性の会）の皆さんの準備により、美味しいお茶と手作りのお菓子を堪能しました。夕食の後には、日本の益戸さんと韓国のジーソンさんという日韓の大学生コンビの司会による楽しい「文化の夕べ」が開かれました。箱根小学校の3年生の児童による和太鼓の演奏から始まりましたが、1ヶ月の練習期間とは思えない程の見事なできばえでした。恒例となったスリランカのカピラさんの楽しいパントマイム、中国国際交流協会のリー先生が美声で披露してくれた中国民謡や田中章博さんの素晴らしいハーモニカの演奏、そして、市川美都江さんご自身の作詩・作曲による二宮尊徳奉讃歌の熱唱等々、時間の過ぎるのが早く感じられた「文化の夕べ」でした。

●中国民謡を披露してくれた中国国際交流協会のリー先生とワンさん

より良い世界家族のために

会議の最終日は、再び早朝7時からの『静かな時間』から始まりました。この日はインドのシャビーンさんのリードで『内なる子供』、子供時代の自分自身を心の中に訪ねて

対話するという試みからスタートしました。

全体会議のテーマは、『世界家族のより良い関係を作るために』です。韓国のチョン・ジーソンさんは、1999年の韓日交流プログラムで、日本の青年たちが韓日間の近代歴史を知らなかったことに衝撃と怒りを覚えたこと、しかし、その中で韓国を愛す一人の日本女性を知ったこと、翌年の日本での交流の際に、日本人ホストファミリーの暖かい心遣いに感激したこと、第二次大戦で多くの無辜の日本人が傷を受けたと知ったことなどにより日本人に心を開けるようになったことを話した後、2002年のオーストラリアでの体験を次のように紹介しました。「その時、ICのコミュニティーハウスには、韓国人や中国人や日本人等も一緒に住んでいました。ある時私達の文化がいろいろと似ていることに日本人の美里さんが喜ぶと、台湾の友人が、『それは、日本の占領によって文化が広がったからよ』と言ったのです。美里さんはショックを受けて、その晩、私ともう一人の韓国人の学生と3時間にわたって歴史の話をしました。彼女はもっと歴史を学びたいと言いました。そのハウスを離れた私が一ヶ月後に、そこに戻ると、彼女は『歴史を学んだの。あなたに謝りたい』といって私に抱きついてきました。それ以来、私が難しい状況に至ると彼女がいつも助けてくれました。一週間前に彼女は韓国に私を訪ねて来てくれ、一緒に楽しい時を過ごしました。お互いを理解しよう、助け合おうとする人が多くなれば、世界に変革をもたらせると思います。新しい世界家族を作るには個々人からスタートすべきだと思います」。

続いて、ユダヤ系アメリカ人のヒレル・レヴィン教授は「家庭の中に愛と信頼を醸成し、それをどんどん社会に広げて行って欲しい」とアピールしました。又、中国国際交流協会のリー・ヤン（李揚）理事は、世界家族のより良い関係を作るための共同の努力、近隣諸国との友好関係の強化・発展の必要性を強調しました。

●語りかけるヒレル・レヴィン教授

私の第一歩

引続き同テーマでの分科会を経て、『私の第一歩 ― 新しい家庭、新しい社会、新しい国、新しい世界を作るために』のテーマで最後の全体会議が開催されました。

先ずインドのカシミールから来たイスラム教徒のシャビーン・フセインさんは次のように話しました。

「『再生した家族、社会、国』とテーマを変えて話したいと思います。2年前の私と今の私はまったく違っています。私は不幸な子供時代を送りましたが、それは家庭・家族の問題からというより社会の制度そのものに起因していました。私のある依存症の問題のため家族に迷惑を掛けました。盗みもしましたし、友人を容易に作れる人たちに嫉妬も感じていました。私のこれまでの人生全てを残念に思っている訳ではありませんが、13年間にわたりこの依存症に大きなエネルギーと能力を浪費してしまいました。私の住む地域では15年にわたり武器による紛争が続き、それが私の依存症にも影響を与えました。私は何時も孤独で不幸な人間でした。心に平和が無く人を憎んでいましたので、友人は誰もいませんでした。一日の最後には何時も孤独感に襲われる人生でした。その当時、この『静かな時間』というアイデアを知ったのです。そして、このIC（MRA）の四つの絶対標準にも出会いました。そして、その時から私の過去の自分を振り返り始めました。正直で純粋な自分になりたいと思い、過去の間違いを正そうと思いました。2年前に勇気を奮って嘘を付いたことを友人に謝り、又、盗んだお金も返しました。又、ねたんでいた人たちに対しても謝りました。容易なことではありませんでしたが、それらをし終えた時、精神的にも情緒的にも強い力を感じました。そして、家族との関係を強化するという第二のステップに踏み出しました。姉妹に対して今まで自分が歩んで来た人生について話しました。それによって私たちの関係が近くなりました。しかし、両親との距離はまだあり、これからの課題です。ここで終わるのではなく、更に歩を進める必要があります。カシミールで紛争に関わる2つのコミュニティーの女性たちとグループを作りました。このグループは平和の醸成のために活動しています。先ず、自分を変え、家族との関係の再生を図り、今は地域社会にと、この変革を広げてきていますが、この3つはそれぞれが関連しあい、同時に進んでいくものだと思います。というのは、自分の過去の問題が完全に解決されたとは言えませんし、姉妹や家族との関係を更に改善する必要も出てくるからです。次のステップとして、イスラムと西洋の橋渡しをして行きたいと思っています。パレスチナとイスラエルの問題に関心を寄せており、そのレベルの仕事を必ずしたいと思っています」。

次にスリランカのカピラ・バンダラさんは、「子供の頃から自分が大人になるまで22年間続いた内戦が、自分の子供が生まれた2000年にようやく終わりました。スリランカにまだ残っている大家族の制度を大切にしながら、この平和を守って行きたいと思います」と話しました。

京都から来た大学院生の鹿取さんは、大学院の宿題が多かったので迷ったが、この会議で沢山の出会いを得て、本当に来て良かったと述べた後、次のような話をしてくれました。「ICに会って自分は変わりました。自分が変わった話だと説得力があり皆にも耳を傾けてもらえます。それが社会や国の変化につながると思います。身近な体験ですが、大学の図書館で傘の袋が散らばっているのを見た時、良心の声が聞こえて、ゴミ箱に片付けることができました。そうすると次の人たちもきれいにしてくれると思います。又、余り関係が良くなかった姉が京都に遊びに来た時、料理を作ったりして暖かく迎えました。姉もとても喜んでくれ、私が北海道の家に帰った時には色々なところに連れて行ってくれ、今では色々な相談ができるようにもなりました。ICには自分が変わって、世の中が変わったという体験を持ち、幸せや感動を分かち合える仲間がたくさんいます。頑張っている人たちがたくさんいるということを考えながら、自分も又、動いて行こうと思います」。又、今回愛媛から初めて参加された吉田知枝子さんは、「知らない人ばかりで最初はドキドキしましたが、参加して良かったです。色々な国の人たちがいましたが、国は違ってもハートは一つと感じました」と話しました。

最後に榊たか子国際IC日本協会副会長は、「この会議で決心したことを是非実行して下さい。次にお会いする時に、家庭が素晴らしく変わった。社会がこのように変わったとニコニコ笑いながら話せるようにしましょう」と呼び掛け、会議は閉会されました。

視野を広げてくれた小田原会議

福田健一郎　早稲田大学2年生（ICユース）

私はIC小田原国際会議に初めて参加して、様々なこれまでにない経験を得ることができました。中でもAction for Life(AfL)のメンバーとの交流や、国際会議でたくさんの人のお話を拝聴する機会に恵まれたことは、特に貴重な経験となりました。そして、何より、自らの家庭について考え直すきっかけになったことは非常に重大でした。

参加するにあたって、いくつか不安があったのも事実です。それは、ユースメンバーとしてICに参加してから日も浅く、英語力にも不安があったための、「国際会議」なるものに参加してうまい具合にやっていけるのか」、という不安です。

しかし、結果的にはその不安は、杞憂にすぎなかったようです。というよりも、そんな小さな不安にびくついていた自分が恥ずかしいです。

まずAfLのメンバーとの交流は、小田原会議の一日前から始まりました。それから、国際会議を経て、その翌週まで続いたのですが、彼らとの交流で一番印象に残ったのは、彼らがこれまでの人生で様々な困難を持っていたにもかかわらず、その困難を解決するために彼ら自身が変わることを実践した、という点でした。彼らの話を聞いていると、盗みを犯していた過去や、依存症に陥っていた過去など、聞いていて居た堪れなくなるような深刻な境遇にあった方もいて、それを私たちに話してくれる姿に、彼らの心の強さを見せ付けられた気がしました。また、言葉の壁は思ったよりも低く、「日本の人口は？」と聞かれ、試行錯誤の末「1200万」と答えているような有様でしたが、なんとかコミュニケーションをとることができました。少しでもコミュニケーションが取れると、今度は語学力を向上させ、より広い世界を見てみたい、という気持ちもわいてきました。国際会議では、さまざまな年代の方々のこれまでの体験を聞くことができました。そのなかでは、社会の結びつきの弱まりは、私たち一人一人の結びつきを弱めていて、良くも悪くも「個人主義」なるものが社会に広がっている現状を思い浮かべました。しかし、このままでは社会はバラバラに崩れていってしまいます。だから、家庭を軸として社会の秩序を保つ、ということはとても重要なことだと思います。しかしそれは同時に、非常に難しいことではないか、と思いました。なぜなら、何かしらの不和や問題を家庭内で抱えている人が思いのほか多いことがわかったからです。誰かが「完全な家庭などどこにもない」と言っていたのが非常に印象的でしたが、全くその通りだと思いました。

では、そのような状況をどう変えればよいのでしょうか。私は、分科会の討論にも助けられ、私の家庭に即して言えば、「少なくとも私自身にとって良い家庭にする」という思考にたどり着くことが重要なのではないかと思うようになりま

●文化の夕べでのコーラス（右端が福田さん）

した。これは、まだ社会に出ていない立場だからこそ考えられることなのかな、とも思っていますが、自分の考え方を良い方向へ変えていくことができるのではないでしょうか。たとえば、家族といえども、究極的には他人であるわけで、家庭内の誰かと私の間にある問題なら、解消に努力して、最終的には解消できるのかもしれませんが、家庭内の誰かと家庭内の他の誰かの間のある問題は容易に解消できるものなのでしょうか？事の発端や理由もわからない第三者の介入への限界を感じてしまいました。私は、自分の家庭の状況をふまえて考えてみたのですが、やはり難しそうだと感じました。ですから、上記のような思考をしてみようと考えたのです。

AfLの来日から、小田原会議を経て、AfLの離日までの約10日間、これまでにないくらい、たくさんの国籍、年代の人と出会えたことは普段の大学生活では決して味わえない経験でした。授業を何日かすっぽかしてでも参加した甲斐があったと思います。またそれと同時に、それまで恥ずかしながらあまりよく把握していなかったICの考え方についても深く知ることができました。そして、これからのユースメンバーとしての活動（8月の日韓中の学生交流など）への大きな励みとなったのは確かです。このように小田原会議から得た経験によって、いろいろな面で考え方の視野が広がりました。また来年も小田原会議に参加することを今から楽しみにしています。

生き方のヒントを与えてくれる小田原会議

益戸　平　　青山学院大学4年生（ICユース）

何故小田原会議は30回近く継続して開催されているのでしょうか。ICのメンバーが集まるためでしょうか。ICという団体を少しでも多くの人に認知してもらうためでしょうか。私にとって小田原会議とは、ICの理念が詰まった空気を自分のボンベに補充し、生活のヒントを与えてくれた場所でした。

私は一昨年、そして昨年、オーストラリアのメルボルンにあるICアーマー・センターを訪ね、ICの理念を学びました。様々な考えと国籍を持った数多くの方々に出会い、刺激し合いながら、あっという間の数ヶ月を過ごしました。そこでは、全ての人が他者のことを心から気遣い、感謝の気持ちを大切にして生活していました。私は当初、「本当にこういう人たちっているんだな」と驚き、戸惑いました。また、そこに存在する空気に促されるように変わっていく自分の言動と、本来のそれにギャップを感じながら生活を始めました。そんな私も滞在後半には、何の違和感もなしに彼らに接することができ、本当に素晴らしい一時を過ごしました。

しかし、帰国後の私は、元の生活に順応し直すように以前の自分に戻っていきました。私生活に溢れる矛盾や理不尽な出来事を前に、ICの理念と現実のギャップの大きさに自分が破壊されてしまうように考えたのです。「自分の世界ではICの理念と共には生活できない」と思い、以前の私に還ってこの会議までやってきました。

そのような中、今回、当小田原会議に参加させて頂き、素晴らしい人々に出会い、またICの空気に触れることができました。特にAfLのメンバーとは、当小田原会議前後にも彼らの日本での滞在をお手伝いさせて頂き、その間にICユースが進めている日韓プロジェクトを紹介したり、個人的な話を通じて意見を交換し合う等、非常に有意義な時間を過ごすことができました。何よりICの考えを実践している多くの方々にお会いでき、本当に心地良く、懐かしく、そして何か大切なものを思い出させてもらいました。

しかし、ICの理念は小田原会議のようにICの人々が会する時のみのものではありません。それを自分が生活している場所にどのように活用していくかが、何より大切であり難しいことです。そして小田原会議とは、定期的にトピックを設けて、各個人が抱える問題について述べ、ICの考えをいかに実践していくのかを話し合っていく場所と、現在私は捉えています。私個人も実際、AFLの方々と日本の社会や家族の問題等について話し合い、自分自身がどのように向き合っていくのか、いくつもアイディアを得ました。ICの空気を補充し、新たな生活へのアプローチを得て、また私は生きていく場所へ帰ります。

●文化の夕べで韓国のジーソンさん（左）と司会をしてくれた益戸さん

アクション・フォー・ライフ 2・レポート

今回の小田原会議では、イギリス、オーストラリア、インド、韓国からの５名の青年、及びニュージーランド、台湾からの２組のご夫妻の９名からなる第2回アクション・フォー・ライフ（註１）のグループに大変に活躍頂きましたが、会議の後にも、学校訪問等のプログラムに参加頂きましたのでその様子をご報告致します。

国際会議終了後、アクション・フォー・ライフ 2（以後、AfLと略す）の行動に関し、最重要視したのは次のことであった。前回（2002年）のアクション・フォー・ライフ1の来日時、地元小田原及び箱根の学校を訪問し、生徒に大きなインパクトを与えると共に、次回についても再訪問の希望が寄せられていた。課題は、そのような経緯とその後新たに生まれた学校との関係を考慮し、限られた日程の中で、今回はどこに焦点を絞り込むかということであった。

アジアセンター中山所長（LIOJ－IIの責任者兼務）が責任者となって、地元のMRA小田原サークルの世話人代表二宮秀夫氏や、高橋正美氏（富士箱根ゲストハウス代表兼箱根町教育委員）などと相談を重ね、ICの事務局との連携のもと、訪問先と種々調整を重ねた結果、次の計画が練り上がった。訪問校は、午前１校、午後１校とし、夕方はホストファミリーとの交流の時間に充てる、というものであった。

＜スケジュール＞

14日（月）箱根観光と箱根小学校訪問

15日（火）箱根明星中学校と箱根恵明学園（併設の小学校）訪問

夕方は、ホストファミリーとの合同交流会

16日（水）小田原千代小学校と川瀬学園小田原ファッションアカデミー訪問

AfL2の一行9人と一部参加者は、国際会議終了の翌日に当たる6月14日（月）箱根観光に出かけた。目的は、休養を兼ねて、日本の誇る世界的な観光地富士箱根の自然や文化に触れることと、そのルートにある箱根小学校を訪ねることであった。

箱根小学校での交流会

当日は、生憎の梅雨模様で、大観山からの芦ノ湖と富士の絶景はお預けとなった。その後、江戸時代、東海道の最大の要衝「箱根の関所跡」を見学。次いで箱根小学校を訪れた。

箱根小学校は、芦の湖畔の元箱根にある小さな町立小学校。目の前には旧東海道の杉並木の巨木が天を突いて聳え立っている。

箱根小学校も、ここ数年児童が減り続け、今年は27名を数える。そんな環境下にあって、この学校では、国際観光地という地の利と、国際化という時代の流れ（天の時）を活かして、鈴木恒美先生のリードのもと、木村校長・二見教頭らのバックアップを得て、極めてユニークな総合学習（国際理解教育）が展開されている。2年前には、AfL１の3人の男子メンバーがここを訪れ、半日各学年の生徒たちと有意義な交流の時間を持った。

昨年の小田原国際会議では、ここの5年生の生徒達が、教育の分科会で“ウェルカムボーイズ”という活動事例を紹介し、参加者に深い感銘を与えた。また、日本文化紹介の場では、4年生の生徒達がソーラン踊りを披露してくれた。そんなことから、昨年9月、中国国際交流協会の郁文団長以下6人の一行が、ICの勉強とNGO活動の視察に見えたときには、箱根観光の途次ここを訪れ、貴重な交流の一時を持った。実は、この時、生徒達との間に一つの約束がなされていた。それは中国京劇のお面をプレゼントすることであった。

今年の国際会議では、2日目の夜、恒例の「文化の夕べ」が催されたが、その開会を、同校3年生による和太鼓の演奏が郷土色豊かに飾ってくれた。そんなことで、当初、同校訪問は計画に入っていなかったが、いろいろ日程調整の結果、今回の同校訪問が実現したわけである。

一行は、同校に着くと、視聴覚教室で先生方と全校生徒に温かく迎えられた。歓迎の挨拶の後、国際IC日本協会の副会長であり日中友好さいたま市民会議の代表である榊たか子氏より、約束の京劇の面の贈呈が行なわれた。そして続く和太鼓の演奏には、AfLのメンバーも特別参加し、次いでマオリ族の歌と踊りを教えたり、生徒達からAfLメンバーの出身国についての質問があり、更に相互の交流は深まった。その後、一行は、ランチルームで職員・全校生徒と一緒に給食をご馳走になった。このような国際色豊かな交流は、恵まれた地の利にある箱根小学校でもめったになく、職員や生徒達に深い印象を残した。

●和太鼓を演奏してくれた箱根小の子供たち

箱根明星中学校と箱根恵明学園を訪問

翌15日(火)の午前中には、箱根町立明星中学校を訪問した。ここでは、城所校長と2年生の英語科主任山室先生と事前調整の結果、2年生2クラスとの交流が計画された。目的は、AfLメンバーとの体験交流と相互理解である。生徒達は、AfLメンバー(5カ国)を手作りの国旗で歓迎、生徒会代表の主導により、視聴覚教室に於て、交換会は進行した。メンバーの自己紹介と団長の劉仁洲氏によるAfLの説明、メンバーによる体験発表や歌の紹介のあと、生徒全員による校歌と応援歌の斉唱、生徒代表による感想の発表と謝辞が述べられ、交流会は終了した。終了後、メンバー一行は、A・B2班に分かれて、実際の授業を参観、英語のTT(ティームティーチング)のクラスでは実際の会話相手として受け答えしたりした。

●明星中学校でニュージーランドのマオリ族の歌を披露

続いて、児童養護施設と小学校を併設する社会福祉施設恵明学園を訪問。まず最初に、田崎吾郎園長より同園の設立の由来と歩み、更に現在の入園者を巡る家庭の状況から社会福祉施設の置かれている現状に至るまで、広範な説明を伺った。敗戦後の日本が辿った苦難に満ちた時代、当初は進駐軍兵士との間に生まれた混血児の世話から始まり、次いで高度経済成長の影の面として次第に露になっていく家庭の崩壊による子供の養育問題、昨今の幼児虐待の問題など、乳幼児から少青年期にある子供達を巡る深刻な状況に関して、多方面にわたる質疑応答が行なわれ、メンバーも日本社会の一面に理解を深めた。

●恵明学園の子供たちと楽しい一時を過ごす

この後、在園の園児や同園に併設されている小学生達と日本の童謡に合わせて、二人ペアーや四人一組でのゲームで盛り上がったあと、AfLメンバーの歌とダンスを楽しんだ。

ホストファミリー5家族との合同交流懇親会

今回、AfLメンバーのために、特別にホストファミリーを引き受けてくださったのは、地元の5家族である。内、3家族は前回のAfLやアジア・大平洋青年会議(APYC)の時にもお世話になり、あとの2家族はIC(AfL)の関係では今回が初めてである。この日の夕方、アジアセンター5階の相模湾を見下ろす会場で、ホストファミリーへの感謝を込めると共に、AfLの活動の紹介も兼ねて、アジアセンター主催で交流懇親会が開かれた。

AfLの活動やメンバー一人ひとりの体験の紹介と共に歌や踊りも披露され、食事を摂りながら交流を深め合った。この会は、前日朝のミーティングで急遽決まったもので、日程的にも会場の都合もここだけがぽっかり空いていて、ホストファミリーも何とか全家庭の都合がつき、まさに大いなる計らいを感じないわけにはいかなかった。

●ホストファミリーの皆さんと共に

小田原千代小学校と小田原ファッションアカデミーを訪問

次いで、翌日の16日には、小田原市内の千代小学校を訪問した。最初、校長室で与那嶺校長と挨拶を交わした後、6年生3クラスとの交流が、学年主任の久保寺先生の司会により、体育館で行なわれた。ここでは、先ごろ佐世保で起きた小学校6年生女児による殺人事件を切口に、人間の持つ怒りの感情について、劉氏より質問が投げかけられ生徒の反応を引き出しながら、会は進行した。

その後メンバーの体験が語られ、質疑応答などがあって、千代小学校のシンボルである大きなケヤキを題材にした歌が全員のコーラスで贈られ、生徒代表の感想と謝辞が

述べられた。昼食は3組に分かれてそれぞれの教室でとり、生徒たちと交流を深めた。ある6年担任の女性教師は、「もっと人間の心の中の感情に目を向けていかなければいけない」と、感想を述べられた。

●給食を共にし、すっかり仲良く

この後、前回に続いて2回目となる小田原ファッションアカデミーを訪問した。ここは、未来の服飾デザイナー養成を目指す専門学校で、高校と短大課程も併設している。ここでは川瀬校長の歓迎の挨拶の後、AfLメンバーの語る体験に学生たちは全員熱心に耳を傾けた。特に、交流会終了後二人の女子学生はメンバーに歩み寄ってきて、皆の前で感想を述べる勇気はなかったが、若い同世代の人たちの体験と決心を聴いて深く感動した旨を涙ながらに語った。

●川瀬校長（中央）を初めファッションアカデミーの皆さんと

その後の活動

箱根や小田原での日程を終えた一行は、17日に東京に移動し、先ず（財）野村生涯教育センターを訪ねた。金子由美子理事長を初め多くのメンバーの方々に暖かくお迎え頂き、6時間にわたり意見交換を図ったり、お互いの活動を紹介しあったりしたが、その目指すところに共通の部分が多いことにとても勇気付けられた。更に翌、18日には、一つのグループがMRAの精神で建学されたという前橋市の育英短期大学を訪ね、櫻井隆志学長からお話しを伺うと共に、学生たちに体験を話す機会も得ることができた。

又、もう一つのグループは、川崎市立小倉小学校を訪ね、多くのクラスの児童と楽しい交流を図った。

●野村生涯教育センターでの交流の様子

20日には、ICユースの青年たちと鎌倉を訪ね、日本の伝統文化に触れると共に、渋谷に集う若い人たちの生態にも接した。一行は、ICユースの青年たちとの交流会、そして、21日の送別交流会を終えて、翌朝、次の目的地である中国に向かって出発した。

●育英短期大学の櫻井隆志学長（右から2人目）及び高橋先生と共に

●ICよつ葉会主催による歓迎会、メンバーは茶道のお点前も体験

【　註1　『アクション・フォー・ライフ（AfL）』について】

和解と融和のメッセージを伝えていく次代のIC/MRAを担う青年たちを育てるべく、インドのIC/MRAセンターをベースに約10ヶ月間にわたる訓練をするプログラム。台湾の劉仁州氏の提唱を受け、インドを初め、オーストラ ア、ニュージーランド、フィジー等のアジア・大平洋地域のIC関係者が中心となって運営に当る。2003年9月より第2回の『アクション・フォー・ライフ（AfL）』が19ヶ国からの33名の参加を得てスタートした。約半年間、インド各地を回った後、マレーシア/インドネシア、そして、カンボジアをベースに東南アジアを回る2つのグループと、台湾をベースに日本、中国、香港等を回る計3つのグループに分かれた。AfLのメンバーたちが訪問して各国から招いた青年たちを対象として、7月にカンボジアで開催された第11回ICアジア・大平洋青年会議（APYC）の運営を最後のプログラムとして終了した。

「心を育む」

相馬 雪香　社団法人国際IC日本協会名誉会長

大転換期に直面する世界

今の世の中は、本当に大転換期。日本だけでなしに、世界が大きな転換期に直面しております。その中で、日本もこのアジアの中で、色々まだ解決しなければならない問題がたくさんございます。それをどういう風に解決していくか。結局は誰に任せるのか。「私には関係ないわ。そんなことは政治家がやるんでしょ？」そうお考えになる方もいらっしゃるかもしれませんが、結局、議会制民主主義というのは、国民の一人ひとりが自分の国のことを考えなければ話にならないのです。そして、政治家と言っても自分たちの票によって選ぶ人たちです。ではどうやって選ぶのでしょうか。「頼まれたから」といった感情だけではなく、本当にこれからの日本のことを考えて、どういう政治をしてもらわなければいけないかを考えなければならないのです。

私の父も長い間政治家として、最期まで日本の国のことを考えておりました。死ぬ直前でございましたけれども、当時"乱闘国会"というのがございました。死ぬ前の二年間は寝たきりのような状態でございましたけれども、その"乱闘国会"のニュースを見るたびに、熱を出してしまうんですね。「日本は一体どうなるのか」。そういった状態の中で、自分のような人間に何が出来るのかと思いがちでございますけれども、そうではないということです。自分には、自分の分の責任があるということを、私自身ずっと考え続けて参りました。

今日、この学校に伺って授業を拝見して、先生方と子供さんたちとの関わりが本当に素晴らしいと思いました。本当に先生方が一所懸命になってやっていらっしゃる。それをまた支えていらっしゃるご家庭の方々、お母様方あるいはお父様方。今の世の中は本当に難しく、昔のように、私の時代のように、簡単ではなかった。しかしそんな時代でも、国が方向を失う時には、大変なことになる。どうやって国が方向を失わないで済むのか？そのことを今、考えなければならないのではないかと思います。

戦争への道

1931年、父は講演を頼まれてアメリカに参りました、その9月18日、ロサンゼルスで号外が出る。「日本が満州を侵略す」という号外でございました。その号外を手にした時から、父は「日本は間違っている」と言い出した。そういう余計なことを言わないように、なんとか黙るように、というようなご意見や圧力が日本から参りましたけれども、父は黙らなかった。講演はニューヨークだったのですけれども、途中、ワシントンに寄りました。そのとき、当時のフーバー大統領に会いに行った父の帰りを、姉と私は、ホテルで待っておりました。父は「残念だ、残念だ」と言いながら帰ってまいりました。「何がそんなに残念だったの？」と聞きました。

●講演する相馬さん

当時の政府は「不拡大方針」を打ち出しておりましたが、出先の軍の勢いが強く、政府の意向に従う様子ではなかったことを知っている父がそのことを説明しても、フーバー大統領初めその場にいた要人たちは、「日本の政府を信頼する」と言ったということでした。

父は明治以来築いてきた信頼が壊されるのを心から嘆いておりました。その時私は、個人の信頼の大切なことを知っておりましたが、国も信頼が大切なのだということを強く印象付けられました。

それが1931年でございます。そして、その年より、日本は、どんどん、日本政府の意向とは別に、軍が強くなって参りました。そして、やがて大東亜戦争ということになります。

先ず自分から

「どうしていいか分らない」。その当時若かった私は、本当にどうしていいか分らなかった。でも生きていかなけれ

ばならない。1937年に私は結婚をして、最初の子供が生まれる、1939年でございましたけれども、その当時の日本の教育の方針も、それまでとは変わって、世界と協調するということが明治以来の日本のひとつの行き方でございましたけれども、『世界と離れてでも、自分たちで行く』と言う感覚になってきました。そういった教育を自分の子供に受けさせたくない。とは言っても、生まれてくる子供をどうすることもできない。どうしたらいいのかと思って父に相談しに参りました。その時、父が「どうしようもない、もう間違っているんだけれども直らない」というようなことを申しました。「父が何も出来ないのに私に何が出来るか」と、本当に悩んでいた時に、たまたまアメリカの友人の紹介で日本に来た女性がおりました。その女性に会った時に、私が「皆間違っている。軍も間違っている、政府も間違っている、大体日本の男の人たちも間違っている」と夢中になって話すと、その女性は、「あなたは、『あの人が悪い、この人が悪い』とばかり言うけれど、1本指をこうやって向けて御覧なさい。3本自分の方を向いているじゃないですか。世界中、皆、同じように相手が悪いと言っているんですよ。しかし相手をいくら悪いと言っても、相手は変わらない。この世の中で変えることが出来るのは、自分だけですよ。その自分から始める。それしかないですよ」ということを言われる。「なるほど」と思いました。大騒ぎをして結婚した主人に対しても、色々文句が出ます。それは人を責めるのと同じ。ではどうしたら良いのか。それに答えるのが、MRA、今はICと言っておりますけれども、その考え方です。「先ず自分から」。一人ひとりが、自分が変わること。しかも世界に共通する、どんな宗教を信じる人においても、また宗教のない人でも、違うと言えないような標準をもつこと。つまり、『正直であること、心もからだもが純潔であること、無私であること、愛を持つこと。その標準に照らして自分を見る』、そういうことを教わりました。こんなことで何が出来るかと思いました。しかし、「心を落ち着けて、自分の心に浮かぶこと—神様を信じるなら神が語りかけてくるだろうし、信じなくても心に浮かぶこと、それを書き留めるように」と言われました。最初に書きとめた言葉が、今でも忘れもしませんが、「もう少し良い妻になれ」ということでした。当時、戦前の日本でございますし、非常に旧式の家庭にあって、妻の立場というのはありませんでした。

そういう立場で良い妻になるのは嫌だと思いましたけれども、今の自分には、少しは変わる所、変えなければならない所があるとも感じました。具体的に何がということを考えて書き留めるということも教わりました。書く。墨、あるいは、インクに勝る記憶はない。自分でしたくないことだと、つい忘れがち。だから書く。それから、私は主人に対して色々注文をつけていたことを、ひとつひとつ謝ることに致しました。また、一緒に住んでいた姑に対して。また、もう1人祖母がおりましたので、祖母は、昔のことでございます、数え年の17歳で嫁に来た人でございます。そういう方たちに対して、ひとつひとつ自分の考え方の間違い、態度の間違いを謝り出しました。主人はしばらくしてから、「気味が悪いね。どうかしたんじゃないのか。大丈夫なのかい。医者に行った方がいいんじゃないかい？」と申しましたから、「いいえ、今、新しい生き方を試しております」と答えると、「なんだ、それは？」と申しますから、先ほど申し上げたようなことを申しました。「ふーん」と考えて、「女にはいいな。だけど僕はごめんだよ」と申しました。その時、ともかく人口の半分は女ですから、人口の半分が本当に良くなれば、世の中変わってくるだろう。それでやろうと決心致しました。私のような一人の人間ができること、ものの考え方も変わってくる。そして、不思議なことに色々な縁が結ばれてくる。色々なチャンスを捉えることを、そうやって「静まって、何が正しいかを考える。どうしなければならないかを考える。できるだけ自分を無にして、何をすべきかを考える」と、不思議と色々な考えが浮かんでまいりました。

その後主人は招集されて、満州の牡丹江(ボタンコウ)に参りました。任官を致しまして、家族を呼び寄せることになって、私も、1943年ですが、小さい子供を3人連れて満州に参りました。44年の暮れ近くになりまして、どうも様子がおかしい。配給が無茶苦茶に多くなってくる。毎日頭の上を飛んでいた、日の丸をつけた飛行機が飛ばなくなる。「どうしたのかしら？」。軍の官舎におりますから、難しいことは何も分りません。ただ、虚心坦懐になって考えた時に、「ここは子供連れの女のいるところではない」と思いました。その当時はまだ、日本の内地の方がものがなくて、まだ空襲も受けてない頃で、満州に疎開をする人たちが多い時でございました。主人と話し合って、「何をすべきか、何が正しいか」を虚心坦懐になって考えた時に、「やはり日本に帰るべきだ」ということで、軍の許可を得て、その時はもう一人生まれておりましたので、4人連れて帰りました。そのおかげで、私も子供たちも無事に戦争が終わるまで生きることが出来ました。ありがたいことに主人の部隊も早いこと満州を引き上げて、朝鮮まで帰ってきておりましたので、終戦の年の暮れまでには、内地に帰って参りました。そういったことを考えましても、自分の立場においてしなければならないこと、それをするためにもまず自分が変わることが必要だということを感じたのでした。

心を育む

「いくつになってそんなことやってるの？」とおっしゃる方もございます。私はいくつになっても三度三度ご飯を食べる。ご飯を食べている間は、心のご飯も食べなくてはいけない。心を育む。心を育てる。そういったことはやっぱり自分を反省することから始まるのではないかと思っております。

面倒くさいと思っても、嫌だと思っても、しなければならないことです。そして近頃つくづく考えますが、色々なことで家庭が崩壊している。色々な事が新聞にも出ております。しかし、つい最近自分自身のことを考えた時に、私は感謝が足りないと気付きました。私は只今、長男夫婦の世話になっております。長男は中学の終わり頃、先生とうまく行かなくなりました。主人も「そんなに難しいなら、学校には行かなくてもいいから」と辞めさせてしまいました。たまたま、私が、先ほど申しましたMRAの関係で、アメリカに会議に行っておりました時に、長男をアメリカに送ってよこしました。その時にも、どうしたらいいのか分らない。本当に祈る気持ちでおりました時に、たまたまある方のご紹介で、アメリカの学校に入れていただきましたが、その学校の校長先生が素晴らしい方でした。私の息子はアメリカに行っても、喧嘩もするし、いたずらもいたしました。そういうことをよく分かってくださり、「遠くに来ているのだから寂しいのだろう」と、ご自分の所に呼んでくださったり、また、「そんなに何かがしたいのだったら、キャプテンになってやったらいい」と言ってくださった。息子から手紙が来て、「今度自分は学校の運動場の整備をすることになった。自分はキャプテンになる。みんな向こうの人はアメリカの国旗を揚げている。だから国旗を送ってくれ」と言って参りました。57年の時で、当時の日本では、国旗を探すのに、随分苦労致しました。しかし、何とか探して送ってやりました。また、向こうの学校にいると「お前の宗教は何か」と言われて、「自分はクリスチャンでもない。それなら日本の神道だ」と言ったら、「それではその説明をしろ」と言われた。「神道に関するものを送ってくれ」と言って参りました。親の方が慌てて、いろんな方にお願いして、子供にわかりやすい神道の本を送りました。そういった大らかさが、その中学の校長先生にはあった。そのようなところで育ってきたその息子でございます。今、色々な伝統文化を大事にすべきと言われておりますけれども、伝統の中には良い物もあるが、悪い物もある。その良いか悪いかを識別する、その気持ちを一人ひとりが持たないといけない。ただ伝統文化を守ればいいというような言い方は、私は間違っていると思います。

そのような経験があったおかげで、昨今家庭の崩壊ということが言われておりますけれども、私は今、長男夫婦の世話になっています。しかし、充分に礼を尽くしていない、感謝を表現していないということに、つい2、3日前改めて気がついて、「有難うございます」とお礼を申しました。

自分のできることを

このように、ひとつひとつのしなければならないことを見過ごして、当たり前のような顔をしている自分、これは死ぬまでそういったくせが続くと思いますが、それを直す。それがICの根本で、世界に共通するところで、どこへ行っても通用するものだと思います。しかも今、日本は大転換期に来ている。日本ばかりではない。ご承知のように世界が大転換期に来ている。アメリカがああやって、イラクに入っていったものの、6月いっぱいで引き上げて、国連に引き渡さなければならない。その後の治安がまだ充分になっていない。色々なことが、本当にこれからどうなるかわからないような転換期に、日本もそれを放って置くのではなく、できることを考える。なにも軍を送ることばかりではありません。私たちの心の中に、そういった転換期に処する道を求め、一人ひとりが、何が正しいかを考えること、それをしていかなければならない、とつくづく感じております。誰にでもできることを、これは子供でも大人でも、私のような年寄りも共通に、感謝の気持ちを持つこと、自分の過ちを認めること、そして自分を偽ることなく、真剣になって自分が世界の一員であるという自覚の中で生きていく、それを考えなければいけないのではないかということをつくづく思います。

今日、こちらに来させていただいて、多くの先生方にお目にかかり、子供さんたちが一所懸命になって勉強している様子も目に致しました。先ほども六年生のクラスに行くと、これからどういう風に生きるべきかということをしみじみと考えている。今、世の中は、先ほど申したような転換期にあって、子供たちを初め、いろいろなことに対して非常に要求が多いと思います。一人ひとり、私自身にしても、うっかりすると、自分に本当に与えられた使命を感じる以上に、自分のやりたいこと、自分の我が出てきてしまう。そういったことにどう止めを刺して、しかも役に立つことができるようになるでしょうか。

新しい世界のために

このICは、始まりはキリスト教の、アングロサクソンが中心でございましたけれども、今は世界中で人種や宗教等の違いを超えて活動しています。ついこの間もアジアの20代の若い人たちが日本を訪れ、色々な学校を訪問しています。その人たちがまた他の国に行っている人たちと集まって、この7月にはカンボジアでICアジア・大平洋青年会議を開催する予定です。カンボジアも色々問題を持っております。そのカンボジアで、このIC的な考え方で、新しく生まれ変わるカンボジアのために働こうとしている一人の日本人の女性が頑張っております。日本も本当に、アジアの将来のことを考える必要があると思います。アジアの将来を考えることは日本のことを考えることでもあり、日本のこれから育つ子どもたちの将来にも、世界の問題にもつながるのです。そのように心を広くして頂きたい。そんな気持ちで、今日は皆様方に、お話をさせて頂きました。

どこから、いつから

要(よう)は、どこから始めるか—始める所は自分。いつから—今、気がついた時。何をする—自分にできること、自分の心に浮かんだこと。まず書き留めること。そして実行すること。さっき言いましたように、世界に仲間がいる。本当に新しい時代、新しい世界を、創造して行く。その一員に日本も加わることが出来る。学校でこういうことをしみじみとお考えいただけるということも、本当にありがたいと思います。

色々申し上げましたけれども、要は一人ひとりが考えて、自分が変わるところを見つける。「どこを変えれば良いのかが分らないわ」とおっしゃる方があるかもしれないけれども、考えれば、自分が間違っている所、謝らなければならなかった所、変えなければならなかった所、色々出てくると思います。そのようなことをお願いするために、今日は皆様方に、こうしてお時間を頂いていることを心からありがたいと存じます。

●授業を参観する相馬さん

(これは、去る6月25日、道徳授業地区公開講座として目黒区立八雲小学校で行われた講演の記録に若干手を加えたものです。)

ICと私

相馬さんの蒔いてくださったタネ

岡本 さくら

思い返せば、5年前に長男の幼稚園クラスで石田寛さん一家と出会ったことが、私にとってICへとつながる道でした。15歳までの11年間を海外で過ごした私は、人種間・異文化間の価値観の違いを思い知らされることが多い中で育ちました。特に宗教的なことでは学級内でも口論となる各国の友人の姿をよく目にしていたため、その溝を和解によって埋めることなど到底望めないと諦めるようになっていました。思春期を過ごしたオランダでは自分が日本人であることに誇りがもてなくなり、帰国後も日本人としてのアイデンティティーを見出せずに悩みましたが、家族や友人に支えられたことで日本の社会で生きていこうと思えるようになり、日本人と結婚し、二人の子供に恵まれました。しかし、戦争が再び起きてしまい、日本も巻き込まれていくという事態に、将来を担うであろう我が子に申し訳ない気持ちになりました。

そんな時に、ICの理念を知りました。「平和をあきらめない。自分ができることをする」長いこと探していたものが見つかった気がしました。そしてまた、相馬さんのお父様が日本の未来を思って尽力されたことを(遅ればせながら)知り、世界の中の日本人としての誇りが持てるようになりました。様々な時代を生き抜いて来られた経験を語り、ICの理念を説いてくださる相馬さんの存在は私にとってこの上ない救いとなりました。

今年の2月に、我が子が通う目黒区立八雲小学校の家庭教育学級で石田さんに講演していただき、当校に加え他校PTA、また区の社会教育指導員の方々にも多大な協力を得ることができ、家庭教育学級としては前例にない規模の講演会となりました。その講演がきっかけで、教員の方から相馬さんの講演会の話が持ち上がり、東京都教育委員会・目黒区教育委員会が共催する道徳授業地区公開講座として今回相馬さんをお招きする運びとなりました。

当日はPTA会長と長野さんと東京駅で相馬さんをお迎えし、12時過ぎに来校して頂きました。校長室で学校長・教頭・校友会幹事とPTA数名と一緒にタンドリー・チキンをメインにした給食を召し上がっていただいた後、昼休み中の校内を散策して頂きました。校庭で元気に遊ぶ子どもたちを2階のベランダから見下ろしながら、相馬さんは周り

にいた子どもたちに「私も小学生の頃はよく走っていたんですよ」と声をかけてくださいました。そして5、6年生の教室で道徳の授業を20分ほど参観していただいた後、講演会場に向いました。会場である体育館の蒸し暑さは、雨が降る中講演を聴きに来た人たちも相馬さんの体調を心配するほどでしたが、30分間起立されたままお話くださった力漲る講演に、場内一同圧倒されたことは言うまでもありません。先生方の間でも大反響だったと後日教員から聞きました。他校からいらしたPTAの方からは「とても心に響きました。姑の手伝いが出来なかったことを素直に謝ることができましたし、小さな単位ですが、すぐに実践できました。今まで出来ていなかったことに気付かされ、背中を押して頂いた気持ちです。今も(講演後から三週間経ってからも)継続しています」という感謝の言葉もありました。

また、「インクに勝る記憶はないのよね」と合言葉のように繰り返しなげかけてくるPTAもいました。日本の財産である相馬さんが八雲小学校で蒔いてくださったタネを今後はみんなで大事に育てていきたいと思っています。

キャリアもない、一般的な主婦である私のような人間が、今回このような特別な機会に関われたことを心から感謝いたします。そしてこれからも「ひとりの小さな行動が世界につながっている」という相馬さんのお言葉を信じ、落胆することなく、勇気を持って世界の平和に希望を持ちたいと思います。

●校内を案内する岡本さん(左)とお嬢さん(右端)

◇◇◇ICニュース◇◇◇

世界のICの最近の動き

■カンボジア
第11回アジア・大平洋青年会議(APYC)

去る7月22日から31日までシェリムアップで開催されたこの会議には24ヶ国から230名が参加しました。「あなたとわたしが築くより良い世界—行動を起こすのは今！、私がやらなければ誰が？今でなければ何時？」のテーマで開かれた会議は、カンボジアのICとクメール青年協会の共催で行われました。28ヶ国からの参加国の中でも、カンボジアからの85名を初め、ベトナム、インドネシア、台湾、そして、韓国から多くの参加者がありました。

会議ではカンボジアや他の地域で希望や癒しをもたらしている青年や年輩の人々の話を聞けたと共に、この会議を通しても新たな回答がもたらされました。例えば、中国系マレーシア人、インドネシアのジャバ人、そして中国系インドネシア人が共にステージに立ち、それぞれがどのように人種的偏見に対する答えを見い出したか、又、それぞれの国において、異なった人種間に橋を架けるために尽くしていきたいという決心を語ってくれました。カンボジアの学生の一人は、彼女が小さい頃に家族を残してフランスに行ってしまった父親に初めて手紙を書こうと決心しました。あるインドネシアの青年はごまかしたお金を父親に返すと約束しました。別のインドネシアの青年は、イスラムの諸宗派、そして、他の宗教を信じる人たちの間に信頼関係を築くために働くと誓いました。特筆すべきことは、双方の国に存する不信感と憎しみの感情に言及しながら、カンボジアとベトナムの青年同士の間で自然発生的に始まった一連の対話でしょう。双方のグループは今後もこのような話し合いを続け、彼らの世代間に新しい橋を築くための計画を練っています。

キム・ヴァス、フィロン・ピシ、ナターシャ・デービス

(ワールド・ブレティン9月号の記事から)

【このアジア・大平洋青年会議(APYC)のために、皆様から多くのご寄付を寄せて頂きましたことを改めて御礼申し上げます。次号のIIAJにて日本からの参加者のレポートを含めより詳しく会議の報告をさせて頂きます。】

■ソロモン諸島

ソロモンでのIC会議が和解の必要性を国にアピール

ごまかしていた5,000万円以上の税金を納めたというビジネスマンの話しを聞けたり、残酷な民族間の紛争の被害者がその受けた苦しみを許すといった姿を目の当たりにできる会議はめったに無いことでしょう。恐らく、そのような話が聞けたため、ソロモン諸島で去る6月21日から24日まで開催されたこのIC会議が連日のように同国の新聞に大きく取り上げられたのでしょう。この南大平洋の国では、異なる民族間の緊張が長く続いています。この会議の開催を呼び掛けた人々は、和解と良い統治、そして、正直さといった問題に関心を寄せてもらいたいと願ったのです。

300人にのぼった会議の参加者は、世界各地からの様々な報告を聞きました。例えば、南アフリカの白人であるジーン・フォーリーさんは、1993年に黒人の解放軍の兵士に他の3人の若い人たちと共に一人娘を殺されました。その彼女が、実際にその命令を下したレトラパ・マヘレ氏と肩を並べて壇上に立ったのです。彼らの許しと和解は聴衆に深い感動を与えました。翌朝、ガダルカナル島から来たスーザン・ククティさんは、マライタ島の民兵に兄弟が斬殺されたことのうらみを語ろうと思っていたのですが、ジーン・フォーリーさんの話しを聞いて、相手を許す気持ちになったと語りました。暴力をはっきりと否定する姿勢のため脅迫を受けたこともある、会議の主宰者、マツー・ワレ氏は、スーザンさんの許しに応えたいマライタ島の人がいたら前に出て欲しいと呼び掛けました。10人余りの人たちが前に出て、スーザンさんを囲んで涙を流しました。

ソロモン諸島での50人の国会議員の内の30人がこの会議の参加者たちに会った時、その関心は、ケニアで選挙浄化運動を進めたジョセフ・カランジャ氏に集中しました。

会議の終了時には、ソロモン諸島の和解と汚職の問題に対する計画が話し合われました。国会議長のピーター・ケニロレア氏は閉会式で、「最近起きた部族抹殺というような悲劇に接して、指導者たちが呆然としている中、あなたたちは正に暗闇に灯った明りです」と述べました。

ジョン・ボンド

（ワールド・プレティン7/8月号の記事から）

今後の予定（海外）

2004年

●9月4日-11日	「自由への基盤」コースの開催	ウクライナ
●10月9日-17日	「クリーン・アフリカ・リーダーシップ・トレーニング」	南アフリカ
●10月20日-24日	IC国際会議「自分の在り方が国の在り方」	サモア
●11月23日-28日	「インターナショナル・ファーマーズ・ダイアローグ」	タイ
●12月26日-1月2日	コー冬期会議	
	「ヨーロッパを理解する－ヨーロッパ人としての生き方を学ぶ」	スイス

2005年

● 2月3日-13日	「40才代以下のICメンバーの国際集会」	ケニア
● 2月3日-13日	「スタディー・コース」	オーストラリア
	（於：アーマーICセンター）	
● 4月8日-30日	「平和の創造者/クリーン・アフリカ・キャンペーン」	ウガンダ

◇◇◇ICニュース◇◇◇

◇◇最近の動き◇◇

■韓国での日中韓の青年会議の開催

先般のサッカーのアジアカップの試合で中国の人々の対日感情の厳しさが浮かび上がりましたが、去る8月19日から24日まで韓国のMRA/ICの主催で日中韓の青年が集り、東北アジア青年フォーラムが開催されました。

中国各地の大学のリーダー10名に日本のICユースのメンバーの大学生・大学院生14名、更に韓国の大学生20名が集まり、率直な意見交換が行われました。詳細は次号のIIAJニュースでご報告致します。

■中国国際交流協会との交流

昨年10月には中国国際交流協会の郁文（ユー・ウェン）顧問を初め6名の代表団を日本にお招きし、各地で有意義な交流を行いました。又、本年の第27回IC小田原国際会議にも、中国国際交流協会より李揚（リー・ヤン）理事他1名が参加されました。今回は中国国際交流協会のお招きで、10月10日から国際IC日本協会の橋本徹会長を初めとしたグループが中国を訪問致します。交流の成果につきましては改めてIIAJニュースにてご報告致します。

■新刊書のご案内

1950年にMRAの創始者、フランク・ブックマン博士の招きで、日本の経済人、労働組合代表、政治家、そして、広島、長崎の市長を含む72名がスイス・コーを初めヨーロッパ各国、そしてアメリカを2ヶ月間にわたり訪問しました。この度、そのメンバーのお一人であった中曽根康弘元総理の手記や関連資料をもとに、当時の旅行を再現した本が出版されましたので、ご紹介致します。

書　名　『1950年の世界一周　～知られざる日本人使節団派遣の大プロジェクト～』
著　者　志野　靖史氏
出版社　ネコ・パブリッシング　（定価1,470円）

今後の予定（日本）

9月25日（土）	例会 2004年IC世界大会、アジア・大平洋青年会議及び日中韓青年フォーラム報告会 13:30-16:30　於（財）日本カメラ財団　601会議室（6階）
10月　2日（土）～　3日（日）	第27回IC関西秋季大会　　於：大阪ロッジ舞洲
10月10日（日）～16日（土）	中国国際交流協会との交流プログラム（中国・北京他）
11月18日（木）～23日（火）	第2回IC日韓大学生フォーラム（於：韓国）
12月	総会/ 年末懇親会（東京）

編集後記

今号のIIAJニュースから、遠藤園子さん、高橋久子さん、中嶋邦子さんに編集のお手伝いをして頂いております。皆様のお力をお借りし内容を更に充実させて参りたいと存じます。次号では、コーの世界大会、カンボジアでの第11回アジア・大平洋青年会議、そして、韓国で開催された東北アジア青年フォーラムの様子もご報告させて頂きます。尚、この機関紙に関しましてご意見等ございましたら、どうぞIC事務局までお寄せ下さいますようお願い申し上げます。